

故京都帝國大學總長本會評議員文學博士濱田耕作先生肖像并筆蹟



渡田耕作

る、岩田孝三學士が本書を上梓された事はその時と人とを得たものとして慶賀に堪へない。

本書の結構は第二章の自然的境界、第三章の人為的境界が本論と見做さるべき所で前者に於て山岳・海洋・河川・湖沼・植物形態を、後者に於て空閑地・軍略境界・民族境界・緩衝地帯・共管地域等を分節論述されてゐる。略マウル、ハウスホーフェル等に據られてゐる。第一章政治境界の概念とその性質は序論として境界の名稱・境界の標式・境界の信仰・境界の發展課程・越境等をのべ、第四章は蘇聯邦の境界問題を紹介され、第五章は滿洲國の境界問題に就いて、著者の見解を示されたもので、この兩章は特殊研究に當るであらう。

本書の特色は從來の政治地理書が殆んど外國文獻の翻譯より一步も出でなかつたものに對し、我國に於ける古代以來殊に濬政時代の境界問題の歴史地理に注意された事で、例へば境界明神による白河關の位置推定、越後に於ける水路による境界紛争等、多くの地圖・史料・寫眞を掲載されて、個別研究を行はれてゐる。稍引用が詳細に過ぎて體裁の統一を亂る觀なしとはいへないが、それだけ本書の獨創性を高め、云ひ得べくんば日本の政治地理の樹立に向はれてゐる事は推變に値する態度である。

たゞ慾を云へば同じく境界と云つても王朝時代の國や濬政時代の藩のそれと民族國家・國民國家間に於けるそれを無差別に同一視點より律すべきではなからうと思はれる。境界概念の發展過程を更に明確にし、眞の意味の國境と、國內境界とを區分して論ぜ

らるべきではなからうか。

とまれ本書は近頃坊間に繕出しつゝある所謂時局物とは類を異にし極めて學究的な良心的著作である。その内容は爲政治家の直に以て參考に資すべき所多きのみならず、交通史・政治史等に興味を有する者にも示唆に富んでゐる。(翁版四四八頁、東學社發行、定價三・八〇)(米倉二郎)

彙報

京都帝國大學總長本會評議員

瀨田耕作博士訃

京都帝國大學總長、學士院會員、本會評議員、正三位勳二等、文學博士瀨田耕作氏は昭和十三年七月二十五日溘焉として薨去せられた。洵に哀悼痛惜の極みである。

博士の考古學への傾倒は、博士が生前屢々口にされたハインリヒ・シュリーマン博士の如く、既に少年の頃に始まつたといふ。年齒僅かに十八歳にして東京人類學雜誌に寄稿して其の天稟不出世の才能を現した許りでなく、明治三十五・六年には日本石器時代住民に關し、坪井正五郎博士と論争し、其の非凡の識見を以て夙に學界を聳動せしめる所があつたのである。早く歐洲に在るや當代斯界の泰斗に就いて考古學の體系を學び、研究法を考究し、また遍く各地を巡歴して見聞を擴められた。かくして三年の留學

を終へて歸朝されるや、本邦に始めて設置された京都帝國大學の考古學講座を擔當せられ、それを中心とした教室並に陳列館の内容の充實と體制の整備に意を用ひ、兼て自らの學を發展されたのである。即ち嶄新なる西歐の學風に自らの創見を加へられ、新進氣鋭の意氣を以て混沌たりし本邦考古學界に於いて始めて科學的考古學を樹立されたのである。年々刊行された京都帝國大學文學部考古學研究報告は一冊毎に學界の水準を昂め、考古學教室をして學界の中心たるの觀あらしめるに至つた。かくの如く博士は科學的考古學を徒らに机上の産物たらしめず、該博なる學識と堅忍不拔の意志とを以て南滿洲・朝鮮半島・本邦各地の遺跡の精緻なる調査によつて呈示されたのである。大正十一年に公にされた『通論考古學』は實に本邦に於いてのみならず、世界の考古學界に於ける空前の體系的概論書として博士の聲名を彌が上にも重からしめたのである。更にまた昭和五年の刊行に係かる『東亞文明の黎明』は永年に亙る東亞考古學の研究による其の粹粹を叙述されたものであつて、始めて東亞の古代文物に體系を興へし名著として不朽のものである。博士は研究に當たり、必ずしも寸餘を惜しまれず、然も一日と雖も忽せにされなかつた。十年一日の如く、充分の餘裕を以て着々と歩武を進められたのである。其の間ものされし論考は無慮三百篇に達し、總べてこれ創見に溢れた大文字であつた。かく觀じ來たるならば博士が世界考古學界の重鎮として盛名を博せられた所以も明かであつて、本邦考古學の今日の發達が博士に負ふこと絶大なるは贅言を要せざるところである。

博士は學界の權威として獨自の研究分野を開拓された許りではなく、後進の誘掖指導をも忘れられなかつた。博士が生前關係された學術團體乃至學會は頗る多く、絶えず研究の補助と指導を心掛けてをられた。大正六年には聚望をえて本會評議員に任じ、爾來二十二年間在任せられ、其の間或いは編纂に參與し、或いは會務の勞を執られ、また他方『考古學之葉』を連載して後輩の指導と斯學の普及に努められた。昭和四年には新村博士と協力して『天正年間遣歐使節關係文書』を本會より刊行され、また翌五年には三浦周行博士の解説になる『景徐周麟畫像・大館持房行狀』を印行された。前者は我が國宗家教史上稀有の資料であり、後者は史料少き足利時代の武家生活を知悉すべき完好な文獻であつて、かゝる貴重なる史料の公表によつて本會は名譽ある功績を荷ひえたのである。本會の學界に占める牢乎たる地位は博士の倦むことなき熱意と努力に負ふことの絶大なるは茲に暇々するを要さぬであらう。

更に博士は考古學が單なる好古の學たるに留まるに甘んぜず、進んで國民精神の陶冶に資することに想ひを到されてゐた。『通論考古學』慶州の金冠塚、『博物館』日本文化の源泉、『日本の民族言語國民性及び文化的生活の歴史的變遷』等々はいづれもかゝる意圖の下に執筆されしものである。就中、今春國定教科書に『古代の遺物』なる一文を請はれるや小國民に考古學の知識を普及するを心から喜ばれ、學徒の本望なりとの抱負を以て欣然として執筆されたのであつた。

かゝる博士の學界並びに教育界に於ける令名は實に叙上の如き

學謙許りではなく、實に其の卓越せる人格に基づく所が多いのである。嚴格にして寛大、細緻にして放曠、凡帳面にして無精、而して其等を貫く高潔にして包容性ある人格は聊かも他人に付度するを許さず、時に應じ緩急宜しきをえて、何人と雖も畏敬心服せしめずにはおかなかつたのである。この人格はまた博士が生前折にふれてものされた數多くの隨筆、紀行文にも現れてをり、試みに『百濟觀音』や『孝子遊記』を繕くならば、人間濱田青陵の面目躍如たるを覺えるであらう。博士はまた興に乗じて彩管を振ひ、和歌も詠まれたが、いづれも淡々として拘すべき味はひを湛へてゐた。

責任感の強い、潔癖な博士は、昨夏總長に就任されて以來大學の肅正に寧日なく盡瘁せられたが、それは一方に於いて博士の心身を刻々と蝕んで行つた。今年四月から或いは轉地し、或いは入院してひたすら療養に努められたが、七月二十三日に至り突如として尿毒症を併發して昏睡状態に陥つた。そして七月二十五日午前八時半、總長官舎に於いて御家族・知友・門下生一同の哀惜慟哭の裡に薨去されたのである。薨去の訃報、天朝に達するや博士の生前學界並びに教育界に貢獻したる功績の偉大なるを嘉し、正三位に追陞し、勳二等旭日重光章を加授せられ、また畏くも靈前に幣帛並びに祭祀料を下賜して以て生前の偉勳を嘉彰し給つた。

越えて七月二十九日午後一時より京都帝國大學本部樓上に於いて神式により學葬が執行された。各帝國大學・東亞考古學會・考古學會・日本古文化研究所・東方文化研究所・國際文化振興會・

獨逸文化研究所・關西日佛學館・朝鮮古蹟研究會・外務大臣・文部省高等官有志・學習院長野村吉三郎氏・上野精一氏・村上長學氏・羅振玉氏・松井元興氏・獨逸國オットー大使・住友吉左衛門氏・辰馬悅藏氏・藤原銀次郎氏等々より供へられた花環・幟・供物は無慮數百に達し、莊嚴に一段の光彩を添へた。齋主誄詞を終へれば、葬儀委員長總長事務取扱平野正雄博士祭壇に登り、教職員學生一同起立の裡に祭詞を奉讀した。ついで文部大臣代理内崎作三郎次官・學生代表中野三令君・卒業生代表大森吉五郎氏・帝國大學代表長與又郎博士、直轄學校代表森總之助氏・京都府知事鈴木敬一氏の弔詞あり、また近衛總理大臣・宇垣外務大臣・アウリツチ伊太利大使等よりの弔電約八百通が靈前に捧呈された。續いて齋主・葬儀委員長・喪主・遺族親族・來賓の拜禮あり、終つて葬儀委員長及び親族代表濱田收藏氏(令弟)の挨拶があつて午後三時より一般告別にはいつた。午後五時、奏樂の裡に撤饌し、莊嚴なりし告別祭を終へるまで、陸續として來たり拜禮する者二千名を越え、故人の聲望の如何に高かりしかを想はせた。本會また博士が生前本會の爲に盡されし功の大なるを想ひ、幟一對及び次の如き弔詞を捧げ謹みて哀悼の意を表した。茲に博士の功績の一斑と葬儀の大梗を記して以て恭しく博士の薨去を悼み奉る次第である。(角田文衛記)

哀 詞

京都帝國大學總長・帝國學士院會員・本會評議員・正三位勳二等文學博士濱田耕作君、染疾久シク、藥食遂ニ瘥差ラ蒙ラズ昭

和十三年歲次戊寅七月甲午朔廿五日戊午且明ヲ以テ上清宮裏ニ歸入セラル。越エテ四日廿九日壬戌小遷、學葬ノ禮ヲ以テ京都帝國大學大禮堂ニ哀弔ノ式場ヲ修メ、清酌商賡ヲ 靈位ニ奠メ、嘉蔬量幣ヲ俎豆ニ陳ネテ、終焉ノ祭儀ヲ舉ゲラル。哀悼痛惜曷シゾ堪ヘム。博士ハ泉州岸和田ノ人、天稟穎悟多能、蔚然トシテ創闢ノ氣性ニ富ム。少小ヨリ好古ノ風アリ。先府君ノ任ニ從ヒテ阿州ニ僑居セラルルヤ、弱冠ニシテ能ク同好者ト謀リテ考古ノ社邑ヲ起シ、率先、和璞ヲ瓦礫ニ探リテ人祖ノ先蹤ヲ案ジ、楛矢ニ生業ヲ稽ヘテ結繩ノ草昧ヲ察セントセリ。後年我が國ノ帝國大學ニ於ケル考古學講座ノ創開者トシテ將々我が國ニ於ケル新學創闢ノ大師トシテ、不磨ノ聲名ヲ中外ニ馳セラレタル蓋偶然ナラザルヲ知ル。是レ豈ニ天、東洋先史期ノ人類生活ヲ闡明セシムベク、岸和田・貝塚ノ水土ノ精ヲ凝ラシメテ、博士ヲ此ノ地ニ出ダシタルナキヲ知ラムヤ。大正五年孟春、本會ノ機構事業ノ更新擴張セラレテ會誌史林季刊ノ舉起ルヤ、翌六年仲冬、衆議ニ依リテ本會評議員ニ任ジ、公務閑勉ノ餘ヲ以テ直ニソノ編纂ニ參畫、裁制刪修大ニ盡サル所アリ。又大正七年一月以還翌八年十月ニ至ルマテ考古學之業ヲ連載スルコト前後八回、以テ斯學ノ鼓吹ト學徒ノ獎引トニ是レ努メ、初メテ我が國ニ於ケル科學的考古學樹立ノ基ヲ開カル。爾來評議員ニ重任スルコト二十有二春秋、其ノ間或ハ編纂ニ、或ハ會務ニ、經理ノ勞ヲ吝マザリシコト再三、就中昭和四年春ヨリ董事トシテ會務ヲ擔當セラルルヤ、嘗ニ講演會ノ主宰、會誌ノ振興ニ覃

精セラレタルノミナラズ、同年ニ天正年間遣歐使節關係文書、翌五年ニ景徐周麟畫像・大館排房行狀ヲ玻璃版ニ景印シ、本會ヲシテ天壤間ノ孤史料ヲ學界ニ提供スル功績ヲモ荷ハシム。本會ガ我が史學界ノ有力ナル一學團トシテ今日ノ聲望ト信頼トヲ博セル、亦博士ニ倦不厭ノ恩養ニモ負フ所決シテ鮮少ナラザルナリ。昨年六月衆望ヲ荷ヒテ京都帝國大學總長ノ大任ニ就カレテ後モ、重職劇務ノ傍、夙夜本會ノ隆昌發展ヲ顧念セラレ、本會亦深ク博士ノ助力ニ期スル所アリシニ、遽ニ薨去ニ遭ヒ痛恨極マリ罔シ。嗚呼西山ノ落日業ニ還シ難ク、東海ノ逝水復々誰有リテカ回シ得ム。今ヤ蓄里ヲ誦シテ高ク九天ニ奎光ノ銷シタルヲ悲ミ、遺影ヲ仰イテ切リニ德音ノ滋キヲ憶フ。音容猶ホ目ニ在リテ其人ヤ則チ亡シ。嗚呼哀シイ哉。聊カ蕪辭ヲ列ネテ生前本會ニ寄セラレタル不朽ノ功績ヲ偲ヒ、以テ哀弔ノ悃誠ヲ捧グ。尙クハ饗ケラレヨ。

昭和十三年七月二十九日

史學研究會敬白

故濱田博士略歷

明治十四年二月 この月二十二日、大阪府南河内郡古市村に誕生す。

明治三十五年七月

第三高等中學校卒業。

明治三十八年七月

東京帝國大學文科大學史學科卒業、引續き大學院に入り、日本美術史を專攻す。

明治四十二年九月

京都帝國大學文科大學講師を囑託せらる。

明治四十三年八月

清國へ差遣せらる。

大正元年十二月

考古學研究の爲滿三年間獨佛英三國へ留學を命ぜらる。

大正二年三月

京都帝國大學文科大學助教授に任ぜらる。

大正五年三月

歸朝。

大正六年九月

京都帝國大學文科大學教授に任ぜられ、重ねて考古學講座擔任を命ぜらる。

大正七年九月

朝鮮總督府古蹟調査員に任ぜらる。

同年十月

同志社女學校専門學部教授に任ぜらる。

同 年十月

推薦により文學博士の學位を授けらる。

大正八年四月

官制改正に付き辭令を用ひず京都帝國大學教授に移り、文學部勤務となる。

大正十四年七月

京都帝國大學評議員を命ぜらる。

大正十五年三月

同志社女學校専門部教授を退職し、ついで辭任す。この年、東亞考古學會を設立す。また日瑞協會理事に任ぜらる。

昭和二年三月

歐米各國へ出張を命ぜらる。

昭和三年三月

歸朝。

同 年七月

京都帝國大學評議員を辭任す。

昭和四年四月

東方文化學院理事に任ぜらる。

同 年十一月

國寶保存會委員仰付けらる。

昭和五年四月

廣島文理科大學講師を囑託せられ、爾來隔年毎に考古學を講す。

昭和五年十月

京都帝國大學文學部長に補せらる。

昭和六年六月

勅旨を以て帝國學士院會員仰付けらる。

昭和七年十月

京都帝國大學文學部長辭任。

昭和八年四月

東京帝國大學文學部講師を囑託せられ次年度に互り希臘美術史を講す。

同 年十二月

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然記念物保存會委員仰付けらる。

昭和十年二月

勳二等に叙せられ、瑞寶章を授けらる。

同 年六月

宮内省臨時陵墓調査委員を命ぜらる。

昭和十一年九月

日本諸學振興委員會常任委員を囑託せらる。

昭和十二年六月

京都帝國大學總長に任ぜらる。

同 年十一月

從三位に叙せらる。

同 年十二月

教育審議會委員並びに文部省教學局參與を仰付けらる。

昭和十三年七月二十五日

午前八時半、總長官舎に於いて薨去す

同 年同月二十六日

特旨を以て正三位に追陞せらる。

同 年同月二十八日

勳二等旭日重光章を加授せらる。

同 年同月二十九日

京都帝國大學本部樓上に於いて學葬に附せらる。

故濱田博士編著目錄

京都帝國大學文科大學考古學研究報告第一冊(梅原末治氏と共著)

西都原古墳調査報告第二冊(梅原氏と共著)

大正六年三月

京都帝國大學文科大學考古學研究報告第二册 大正七年七月

希臘紀行 大正七年七月

京都帝國大學文科大學考古學研究報告第三册 (梅原氏・島田 大正八年十月)

貞彥氏と共著 大正八年十月

南歐遊記 大正九年九月

京都帝國大學文學部考古學研究報告第四册 大正九年十月

京都帝國大學文學部考古學研究報告第五册 (榑原政職氏と共 大正九年十月)

著) 京都帝國大學文學部考古學研究報告第六册 (長谷部言人氏・ 大正十年十一月)

島田氏と共著) 『泉屋清貨』彝器部三册 大正十一年

『泉屋清貨』彝器部三册 大正十一年

慶常北道慶尚南道古墳調査報告(梅原氏と共著) 大正十一年三月

通論考古學 大正十一年七月

『陳氏舊藏十鐘』鐘概説及圖版解説 大正十一年

金海貝塚發掘調査報告(梅原氏と共著) 大正十二年三月

京都帝國大學文學部考古學研究報告第七册 (新村出氏・梅原 大正十二年六月)

氏と共著) 京都帝國大學文學部考古學研究報告第八册 (梅原氏と共 大正十二年十一月)

著) 京都帝國大學文學部陳列館考古圖録 大正十二年

『慶州金冠塚と其遺寶』上册(梅原氏と共著) 大正十三年九月

支那古明器泥象圖説 大正十四年二月

京都帝國大學文學部考古學研究報告第九册 大正十四年八月

有竹齋古玉譜(古玉概説) 大正十四年

百濟觀音 大正十五年五月

橋と塔 大正十五年八月

ミハエリス氏美術考古學發見史 昭和二年一月

京都帝國大學文學部考古學研究報告第十册 (梅原末治氏・島 昭和二年三月)

田貞彥氏と共著) 昭和二年五月

有喜貝塚調査報告 昭和二年

『泉屋清貨』續篇上册 昭和三年

慶州金冠塚と其遺寶圖版下册(梅原氏と共著) 昭和四年

博物館 昭和四年

貔子窩 昭和四年三月

天正年間遣歐使節關係文書(新村氏と共編) 昭和四年

考古遊記 昭和四年七月

東亞文明の黎明 昭和五年二月

東亞考古學研究 昭和五年三月

天正遣歐使節記 昭和六年四月

モンテリウス氏考古學研究法 昭和七年十月

慶州の金冠塚 昭和七年十一月

南山裡(島田氏と共著) 昭和八年八月

刪訂泉屋清貨(梅原氏と共編) 昭和九年八月

京都帝國大學文學部考古學研究報告第十三册(梅原氏と共著) 昭和九年九月

京都帝國大學文學部陳列館考古圖録(續編) 昭和十年五月

樂浪彩霞塚遺物彙英(梅原氏と共編) 昭和十一年十一月

京都帝國大學文學部考古學研究報告第十四册

昭和十二年十月

サンテ師『遣歐日本使節對話錄』(全譯)

昭和十二年

佛國寺と石窟庵(藤田亮策氏・梅原氏と共編)

昭和十三年

赤峯紅山後(水野清一氏と共著)

昭和十三年九月

故濱田先生追悼會記事

九月二十五日、文部部史學科を中心として受業生相寄り、故濱田耕作先生の追悼會を百萬遍知恩寺及び大學内陳列館において營んだ。御遺族をはじめとして、遠近より相會するもの實に二百數十名。午前九時三十分より、百萬遍本堂において林支明師を導師として法要の式を擧げ、十一時頃終了した。戒名は文簡院青陵常樂居士といふ。齋の後、教授西田直二郎氏・上野精一氏・教授植田壽藏氏・太田喜二郎畫伯、廣島高等師範教授浦廉一氏等こどもも起つてありし日の思ひ出話をされた。午後二時頃より故濱田先生が銳意經營された陳列館の考古學陳列室を開放し、隣接の實習室には遺著及び先生關係の出版物、及び遺稿・手帖・畫帳などをならべ、階上貴賓室には遺墨を陳列した。法要參列者のほか學生及び一般の人々も參觀し、五時すぎまで盛況を極めた。なほ追悼會記念として繪葉書を發行、參會者及び贈金者に頒つたが、別に考古學教室は教室の標本繪葉書第十五輯を參會者に贈呈した。

第一室遺著・遺稿及び手帖

一、自著(別に掲げた著述目録に同じである)

二、關係出版物

葉報

一、考古學教室報告書第一—第十四册

一、東亞考古學會報告書第一—第四册・第六册、乙種第一册及び論叢二册

一、朝鮮古蹟研究會報告書第一・第二册及び年度報告五册

一、東方文化研究所報告書第一・第二・第五・第七及び響堂山石窟・支那と佛蘭西美術工藝

一、其他關係出版物

島田貞彦氏『南來美術裝飾圖集』(大正十一年刊)、故榊原政職氏『人類自然史』(大正十二年刊)、藤田元春氏『日本民家史』(昭和二年刊)、末永雅雄氏『日本上代の甲冑』(昭和九年刊)、故植村清之助氏『西洋中世史研究』(昭和十年刊)、角田文衛氏編『國分寺の研究』二册(昭和十三年刊)、故森本六爾氏及び小林行雄氏『彌生式土器聚成圖錄』(昭和十三年刊)等。

三、遺稿

一、漢唐の間に於ける希臘的美術の東漸を論ず(明治三十八年卒業論文、縦罫半紙墨書)

一、日本上世美術史(明治四十二年講義案、縦罫半紙墨書)

一、考古學通論(大正元年講義案、縦罫半紙墨書)

一、考古學通論(大正五年講義案、縦罫半紙墨書)

一、日本考古學(大正六年講義案、縦罫半紙墨書)

一、支那考古學概説一(大正八年講義案、縦罫半紙墨書)

一、希臘考古學(大正八年以降講義案、横罫ノート、インキ)

一、希臘先史考古學(未定稿、縦罫半紙墨書)

第二十三卷 第四號 八九九

一、國定教科書古代の遺物第一稿(昭和十三年五六月頃、縦罫罫紙墨書)

附同第二稿校正刷

四、手帳及び畫帳

一、畫學帳(明治二十五年頃、徳島小學校時代)

表紙の「畫學帳、濱田耕作」見返し「禁徒書」(父源十郎氏の筆。なほ表紙に「Yokushima」とあり。花卉・葡萄・家屋・汽車・船・風景等の繪あり。)

一、歴代天皇山陵圖志、第一編、和泉之部(明治二十七年一月五日、大阪附屬小學校高等科時代)

半紙四ツ折、表題の傍に「臣平耕作撰」とあり、また「本志明治廿七年三月三十一日迄に書直すべし」と赤インキの追書あり。反正・仁徳・履中と三帝の皇陵の繪を収む。墨書淡彩。

一、旅行のしがらみ第貳(明治廿八九年、大阪府第一中學校時代)

裏表紙に「青陵山史」(維時明治廿八年十一月九日買求大府京界堀)などと書す。笠置山・平等院・萬福寺・桓武天皇陵・安樂壽院・加名生皇居・多武峯等のほかに懿徳天皇以下大和河内の諸帝陵の繪を多數に収む。尤泰天皇陵は投影圖法によつて平面圖と側面圖とがある。

一、平安史學會記事(明治三十三年二月起、第三中學校時代)

半紙四ツ折數葉。表題の傍なほ「青陵生」の文字あり。深

草神山古墳・將軍塚・乙訓鏡山古墳・太秦天塚古墳・大學圖書館等見學のこと、また柴・中田・森・森口・阪倉・遠藤等の名見ゆ。

一、畫帳(明治三十二年頃)

早稻田中學水泳、人物スケッチ、大山・倉吉の風景。

一、帶歐畫帳(大正三年頃)

アシシ等の繪あり。

一、手帳(大正五六年頃)

九州考古學調査の記錄。

一、手帳(大正五六年頃)

九州裝飾古墳調査、住友家古銅器調査、八幡茶白山、玉手山安福寺石棺等。

一、朝鮮畫帳(大正十三年頃か)

佛國寺・石窟庵及び慶州諸遺物。

一、北支・南滿畫帳(大正十四—昭和二年頃)

雲崗・魏子窩等のスケッチ。

一、畫帳(昭和八年頃)

土佐龍河洞・廣島・鹿兒島・旅順老鐵山・羊頭灣・大和石舞臺等のスケッチあり。裏見返しに隅に小さく「二階から隣の庭の乾竿に湯もじ乾すらし白き手の見ゆ——昭和八年十一月十九日」とあり。

一、滿洲畫帳(昭和十年頃)

南滿洲九寨・小石柵等のドルメン、輯安縣風景のスケッチ

チ。

第二室遺墨

- 一、唐詩五言絕句(明治三十三年頃) 静岡永田莊作氏藏
- 一、游子裝(明治三十八年頃) 静岡永田莊作氏藏
- 一、滯歐書信(大正三年頃)
- 一、附森歐外(即興詩人)二册 歐羅巴へ携帶されしもの
- 一、水彩朝鮮風景三(大正七年)
- 一、油繪傳法堂(大正八年頃) 京都市岩井武俊氏藏
- 一、油繪洛北風景(大正八年頃)
- 一、油繪慶會樓(大正九年頃)
- 一、油繪裸婦(大正九年)
- 一、裸婦スケッチ(大正九年頃)
- 一、朝鮮繪卷(大正十三年) 京都太田喜二郎氏藏
- 一、太田喜二郎畫伯繪 濱田先生詞 末尾に一部先生の繪あり
- 一、繪卷雲崗より明陵まで(大正十四年)
- 一、太田喜二郎畫伯繪 濱田先生詞
- 一、瑞典王宮内の一室スケッチ三(昭和二年)
- 一、西班牙風景二(昭和三年)
- 一、黄不動拜觀繪卷(昭和五年) 京都太田喜二郎氏藏
- 一、太田喜二郎畫伯繪 濱田先生詞
- 一、墨繪石舞臺並びに歌(昭和八年) 大和橋寺藏
- 一、パステル赤峰紅山遺蹟(昭和十年)
- 一、繪卷萬葉抄二卷(昭和二十年頃)

彙報

- 一、掛軸送春賦(昭和十一年) 奈良岡嶋誠太郎氏藏
- 一、横額聽水居(昭和十二年) 静岡永田莊作氏藏
- 一、横額以和爲貴(昭和十二年)
- 一、イタリヤ會記事題字(昭和十二年)
- 一、子を失へる人への弔み文(昭和十二年八月十六日堀體爾様御内宛)
- 一、色紙滋子の子を失へるをいたむ
- 一、横額犢獨(昭和十三年)
- 一、昭和十三年宣誓式總長告辭案(昭和十三年)
- 一、佛國寺と石窟庵題字(昭和十三年)
- 一、優勝旗揮毫(昭和十三年)
- 一、繪卷石舞臺見學行(昭和八・十三年)

太田畫伯繪 濱田先生詞書に及ばず長逝されたため詞も太田畫伯。

一、海外交友錄二册
一、はモイス先生よりの來信、他はベトリ、スタインその他諸氏の來信を濱田先生みづから整理されたものである。
(水野清一記)

史學 研究會

六月二十五日(土)午後一時半より陳列館第一教室に於て開催、左記の講演があつた。來會者百餘名。
勤修寺家文書に就いて
中村 直勝氏

第二十三卷 第四號

九〇一

昨年四月勸修寺伯爵家が家宅を東京に移されるに際して、その歴代寶藏の古文書舊記の類をあげて國史研究室に寄託されることになつたに就いて、爾來私は研究の餘暇をさいてその整理に當つてみるが、今日まで目錄の完成したものの約九百點、全部の整理が了るまでにはなほあと數年を要するであらうが、今日その中間報告をなすこととする。

勸修寺家は關院左大臣冬嗣の孫高藤に興り、その地位攝籙家の如く高くはないが、古くは參議、大藏卿、下つては傳奏として直接政治の實務に關與するところが多かつたから、その家の記録は史料として貴重なるものが多い。平安朝の末爲房爲隆にはそれ／＼大御記、永昌記があり、戰國時代の晴右には晴右記があつて共に世に知られてゐるが、文書には皇室との間の特殊の關係よりして宸翰が殊に多く、また武家傳奏たりし關係よりして武家との間の隱密の文書も少くない。まづ日記に就いていへば、

一、大御記 卷子本六卷、第二卷(永保元年)は具注曆に記され原本たること明らかであるが、他の五卷にも紙背文書があつて最も原本に近いものであることが知られる。第一卷承暦二年、第三卷永保二年、第四卷應徳二年、最後に「見了(宣房花押)」とある。第五卷嘉保二年、第六卷長治元年、この巻のみ筆蹟が他と異つてゐる。

二、永昌記 卷子本六卷、第一卷嘉承元年六月の終に長承四年二月八日勸解由次官平忠盛の申狀承了との文書があり、その書寫の年代を知ることが出来る。第二卷同年九、十月には永萬、仁安

等の紙背文書があり、就中宿紙の院宣や建久八年の筆記を有する折紙の存在の如きは古文書學上よりも注意すべきものであらう。

三、御遺書條々 正治二年二月廿八日經房の處分狀であり、家領莊園の外、家の記録の處分に就いても言へるところがあることは興味深い。その中には但御記・永昌記・吉記等の名が見える。文書としては宸翰のみでも殆ど百餘通に上るが、特に正親町・後陽成等の御代のものが多く、その他は大むね節會の散狀や加點の御詠草等であつて内容としては見るべきものが少い。これらの宸翰は寛永以後高顯・經慶・經廣等の代に一度整理されたことがあるらしい。云々

右の講演に因んで勸修寺家文書中の重要なものを別室に展觀し一般來聽者の縦覽に供した。

支那文化の同化力説に就いて

羽田 亨氏

(右は追て本誌に掲載の管につき梗概を省略する)

東洋史談話會

六月二十三日(木)午後三時より樂友會館に於て、例會を開催。左記講演があつた。

金の海陵王燕京遷都の意義

田村 實造氏

東洋史研究會講演會

七月十一日(月)午後一時半より東方文化研究所に於て開催。四月初渡支、雲崗石窟の調査に従事し、又北魏平城々遺蹟の下調査

を行つて七月四日歸洛した水野清一氏が、石窟調査の經過、平城
々址發見の顛末、晋北自治政府の活躍振等について興味深い談話
をなした。

宮崎助教授の歸朝

文部省在外研究員として佛國巴里に於て支那南海交通史の研究
に従つてゐた宮崎市定助教授は、二ヶ年半の研究期間を了へ、米
國經由、八月二十日早朝横濱入港の秩父丸で歸朝、同夜歸洛した。
第二學期より講義を始められるが、殊に特殊講義「近世南方交通
史」は嶄新なものと期待されてゐる。

羽田教授の支那滿洲出張

羽田教授は東亞文化協議會に列席のため八月二十一日京都發、
海路大連經由北京に向ひ、會議終了後、大同・包頭・方面を視察
し、大連經由九月二十二日歸洛せられた。

地理學談話會

六月二十三日 午后六時 於樂友會館

徐州會戰從軍談

岡本 重彦

出席者 藤田元春・廣瀬洋慈・吉田敬一・室賀講師以下十七名。

小牧教授の論朝

去七月アムステルダムに開かれた國際地理學會に日本代表と
して出席された、小牧實繁教授は、無事その使命を幸へてアメリ
カ經由、去月廿四日歸洛された。

會 報

○委員 異 動

本會委員東洋史專攻文學士今西春秋氏は、清朝史研究の爲め北
京に留學することとなり、八月二十九日出發したので、代つて東
洋史專攻文學士外山軍治氏を委員に囑託した。

○會 員 動 靜

◇入 會

神戸市須磨區磯馴町三丁目二三ノ七 西川光一氏
京都市上京區小堀池町一五ノ七 山田方 近田吉夫氏
京都市豐島區長崎町一丁目八三四 桂 泰藏氏
京都市左京區田中大塚町三一 小川裕人氏
京都市東山區大津畑、西村方 津本 了氏

◇轉 居

京都市杉並區馬橋四ノ四八六 飯沼守麿氏
市内右京區北白川高原町六三三 井上智曾氏

c/o Harvard-Yenching Institute Boylston Hall,

Cambridge, Mass. U. S. A. Mr. Edwin Reischauer

◇退 會

脇谷鶴謙氏

◇死 亡

桂 五十郎氏 駒井 毅氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄(九月現在)

矢野仁一著 東洋史大綱
 原田淑人著 漢六朝の服飾
 新見吉治著 すめらみくに
 八木英三郎著 朝鮮威鏡北道右器考
 稻葉博士遺曆記念滿鮮史論叢
 朝鮮史料叢刊、第八、肩嶽日記草、五
 朝鮮史料集眞續解説 第一・二・三・四・五・六輯
 史學雜誌 四九ノ七・八・九
 歷史地理 七二ノ一・二・三
 社會經濟史學 八ノ四・五・六
 史苑 一一ノ一
 人類學雜誌 五三ノ六・七・八・九
 考古學雜誌 二八ノ七・八・九
 文 化 五ノ七・八・九
 國學院雜誌 四四ノ七・八・九
 史迹と美術 九ノ七・八・九
 經濟論叢 四七ノ一・二・三
 考古學論叢 八
 イスラム 四
 社會學徒 一二ノ七・八・九
 史學 一七ノ一

著者 東洋文庫
 著者 東京人類學會
 著者 東京人類學會
 朝鮮史編修會
 朝鮮史編修會
 日本歷史地理學會
 社會經濟史學會
 立教大學史學會
 東京人類學會
 考古學會
 東北大文科會
 國學院大學
 史迹美術同致會
 經濟學會
 考古學研究會
 イスラム文化協會
 社會學徒社
 三田史學會

史學研究 一〇ノ一
 國史學 三五
 龍谷史壇 二二
 立正史學 二ノ一
 臺大文學 三ノ三
 南方土俗 四ノ四
 國民精神文化 四ノ二
 史觀 一六
 宗學研究 一五
 西洋史研究 一三
 東洋史研究 三ノ五
 中國文學月報 四〇・四一・四二
 善隣協會調查月報 七四・七六
 歷史學研究 八ノ六・七
 京城帝大史學會誌 八
 軍事史研究 三ノ四
 哲學研究 二三ノ七・八
 紀州文化研究 二ノ八

Mitteilungen der Auslands-Hochschule an der
 Universität Berlin. 40. Seminar für Orientalische Sprachen

廣島史學研究會
 國史學會
 龍大史學研究室
 立正大學史學會
 臺大文學會
 南方土俗學會
 國民精神文化研究所
 早大文學部
 谷大宗學研究室
 西洋史研究會
 東洋史研究會
 中國文學研究會
 善隣協會
 歷史學研究會
 京城大史學會
 軍事史學會
 京都哲學會
 紀州文化研究所

○中山治一氏は七月號に引續き「成立期の近代國家(下)」を本號に
 寄稿せらるゝ筈の處、九月一日應召、丸龜第十二聯隊に入隊され
 ました爲、輝しき凱旋の曉迄之を延期致します。同氏の御健在を
 祈ります。